

研究主題「音楽的な感受、思考・判断の過程を重視した創作の指導」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
三鷹市立中原小学校 教諭 北村 佳子

1 研究の背景とねらい

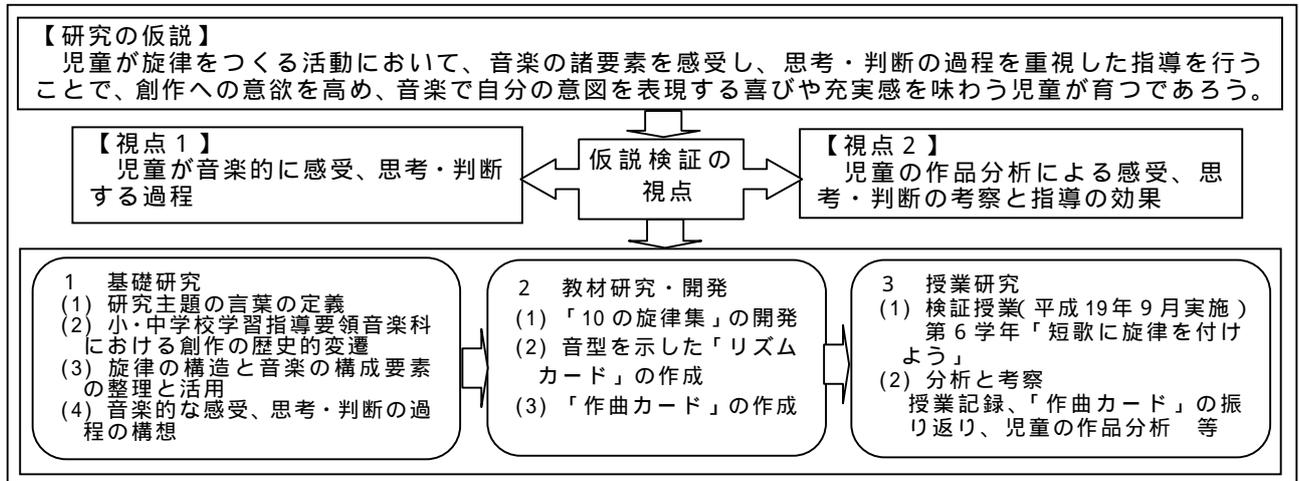
児童が創造的に音楽を表現するためには、主体的に音楽とかかわり、曲想や音楽の構成要素を感受し、思考・判断しながら自分の思いや意図を音楽で表現することが大切である。そのため、指導の工夫や教材開発、学習過程等の改善がますます求められている。

「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ（案）」（平成19年11月7日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）によれば、音楽科の課題として、「感性を高め、思考・判断し、表現する一連のプロセスを働かせる力の育成」「我が国の音楽文化に愛着をもち、他国の文化を尊重できる態度等を養う」等が挙げられ、領域面では、歌唱の活動に偏る傾向があり、創作と鑑賞の充実が求められている。特に創作の活動は、音楽的な感受、思考・判断力と直接かわる領域であり、一層の指導法の工夫・改善が必要と考える。

そこで、研究のねらいを、児童が短い旋律をつくる活動を通して音楽を感受し、思考・判断する過程を重視した指導の工夫と教材開発とした。

研究の内容と方法

研究主題に迫るために、以下のように仮説を立て、仮説を検証するために二つの視点を設定し、教材開発、指導の工夫について研究を進めた。



1 基礎研究

(1) 音楽的な感受、思考・判断の定義

音楽的な感受...音の刺激に鋭く反応し、音楽の表現媒体や構成要素、作曲法や編曲法などの特質を鮮明に感じ取る能力
 音楽的な思考...音楽に対する直感をはたらかせたり想像を膨らませたりして、音楽に深い思いをめぐらせ、より豊かな音楽活動の方向を見いだす力
 音楽的な判断...課題や意図などに基づいて、例えば旋律を美しく演奏するための工夫をしたり、適切な音色や音量、音価の変化を選んだりして、音楽を表現する方向などを判断する力
 (「子どもと音楽のかかわりを深める音楽科授業論」(金本 正武著、平成9年、東洋館出版社)及び「小学校指導資料音楽科」(平成7年、文部科学省)より抜粋)

(2) 小・中学校学習指導要領音楽科の歴史的変遷における創作活動の重要性

昭和22年から現行学習指導要領音楽科の創作活動についてまとめたところ、児童・生徒が声や楽器、様々な音の素材を生かし、自分の思いや意図を表現するためには、音楽を感受し、思

考・判断する創作の指導が重要であるととらえた。また、旋律創作について、小学校高学年では、8小節程度（一部形式）が適切であると考え、検証授業に生かすこととした。

(3) 旋律の構造と音楽の構成要素の整理と活用

本研究では、旋律をつくる活動を通じた指導の工夫を行う。そこで、旋律をフレーズ、動機、音型から成るものとしてとらえ、指導の工夫及び作品の分析に生かすこととした。

(4) 児童が音楽を感受し、思考・判断する過程の構想（図1）

児童は音楽を聴くと、「楽しい感じ」などの曲想や「だんだん強くなる。」など、音楽の構成要素・曲の構成を聴取する。指導者が曲想とその要素・構成を関連付けて感受する指導を行うことで、児童は分析的に音楽を聴くようになる。

歌詞から旋律をつくる活動では、児童は歌詞のイメージや言葉の抑揚等から、「～の感じにしたい。」という思いや意図をもち、フレーズや動機、音型について思考・判断しながら、自分の音楽としていくと考える。

研究の結果と考察

1 音楽的な感受、思考・判断を支える教材開発と指導における活用

(1) 「10の旋律集」の開発と活用（図2）

検証授業前に児童が書いた短歌を使って指導者が旋律をつくり、伴奏付けを行った。その結果、短歌の文字数では、一部形式の旋律をつくることの難しさが分かった。そこで、短歌を二つのフレーズに分けたり、言葉を繰り返して二つのフレーズにしたりする必要があると考えた。

児童が書いた短歌を部分的に変更し、長音階6曲、民謡音階2曲、琉球音階2曲から成る「10の旋律集」を開発した。この旋律集を児童が聴いたり歌ったりすることで、音階の違いによる曲の雰囲気だけでなく、フレーズ感や言葉と音高、音型との関係を感じることができると考えた。

(2) 「リズムカード」の作成と活用（図2）

歌詞に付ける旋律のリズムとして適切な16種類の音型を示した「リズムカード」を作成して黒板に掲示し、児童が歌詞を様々なリズムで音読することによって、思考・判断しながら動機やフレーズをつくることのできるようにした。

(3) 「作曲カード」の作成と活用

児童がつくった旋律を記録しやすいよう、五線に音符を記録するタイプとカタカナで階名を記録するタイプの「作曲カード」を作成した。児童は自分の記譜の能力に応じてどちらかのカードを選択し、音高やリズムを書き込むことができるようにした。

2 検証授業

検証授業は、第6学年を対象に「短歌に旋律を付けよう」の題材で行った。題材の目標は、

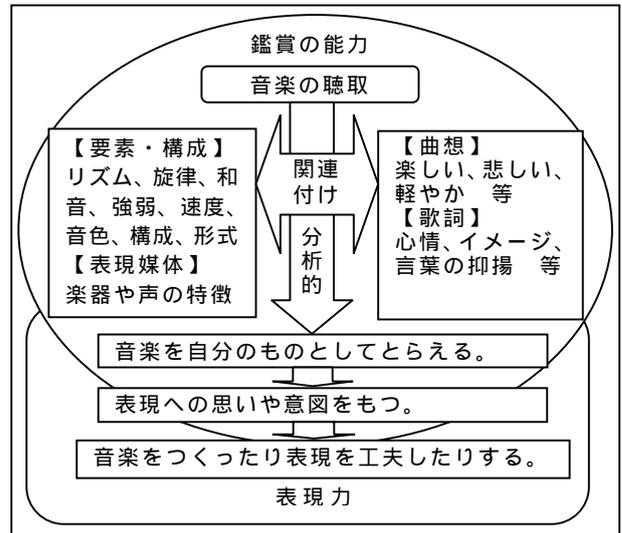


図1 児童の音楽的な感受、思考・判断の過程



図2 「10の旋律集（長音階）」と「リズムカード」の例

「長音階、民謡音階、琉球音階から音階を選択し、一部形式（8小節）の旋律をつくって表現する活動を通し、音楽を感受し、創造的に音楽活動をする態度と能力を養う。」と設定した。

主な活動内容としては、児童が国語の時間に宿泊的行事の思い出を書いた短歌を歌詞とし、長音階、民謡音階、琉球音階から一つの音階を選んで旋律をつくる。その際、「10の旋律集」を聴いて音楽の雰囲気、音高やリズムを感受し、「リズムカード」から音型を選んだり楽器を使ったりして、思考・判断しながら「作曲カード」につくった旋律を書き、歌って発表し合う。

(1) 授業の結果より

児童が旋律をつくる過程を以下の段階として組み立て、分析及び考察に生かすこととした。

【課題の把握と音楽を感受する段階】

児童は、長音階、民謡音階、琉球音階の構成音で指導者が開発した「10の旋律集」を聴いて、それぞれの旋律の雰囲気や特徴を感じ取り、自分の短歌のイメージに合う音階を選んだ。長音階を選んだ児童は22人、民謡音階8人、琉球音階8人であった。各音階を選んだ児童の感想（抜粋）は以下のとおりである。

- ・長音階...繰り返されている所の音程と、メロディがきれいだったから。
- ・民謡音階...和風っぽくて、自分の短歌が昔の日本の感じにあてはまると思ったから。
- ・琉球音階...沖縄風の音楽で、魚釣りの楽しそうな様子を表したかったから。

次に、階名で書き込むタイプと音符で書き込むタイプの「作曲カード」のどちらかを、自分の記譜の能力に応じて選び、旋律をつくる準備を行った。音符で書き込むタイプのカードを選んだ児童は10人、階名で記録するタイプのカードを選んだ児童は28人であった。

【思考・判断する段階】

歌詞に旋律を付ける際、言葉の抑揚を生かした音の高低やリズムを考える必要がある。児童は毎時間、「10の旋律集」を聴いたり歌ったりするとともに、言葉の抑揚と音高の関係を意識する。このためには、指導者が「飴と雨」、「橋と箸」等の単語を声に出したり手で音の音高を表したりする指導を行い、児童は「作曲カード」(図3)に言葉の抑揚を考え、歌詞を上側と下側に分けて書き、旋律の音高を工夫する手掛かりとした。

次に、リズムを工夫するため、指導者が16種類の「リズムカード」を黒板に掲示し、歌詞の一部を様々なリズムに置き換えて読んだことにより、児童は自分の歌詞を様々なリズムで読みながら思考・判断し、「作曲カード」に歌詞や音符、階名を書き込んでいった。

旋律をつくる活動では、教室内の6箇所のコナーにおいて、それぞれの音階で使用する音の色別シールを貼っておいた鍵盤楽器や木琴等を使い、即興的に旋律をつくっていた。

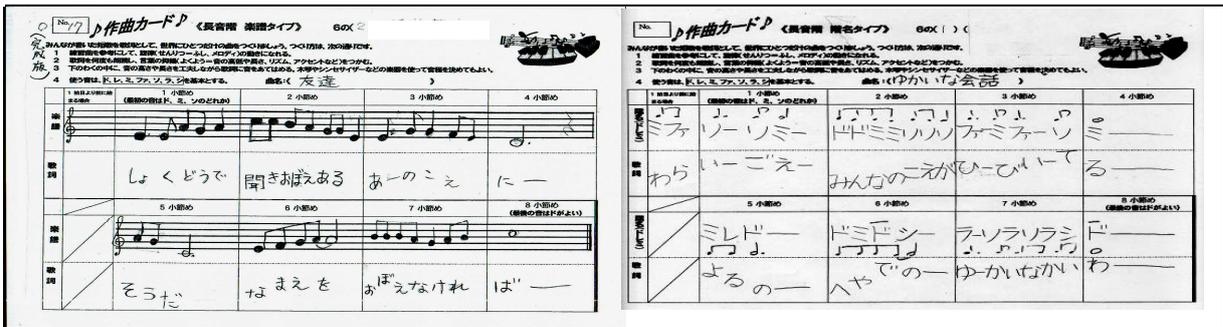


図3 児童が書いた「作曲カード」(左は音符タイプ、右は階名タイプ)

【思考・判断の段階～音楽の感受の段階】

児童は、友達や指導者と相談しながら旋律をつくり、意欲的に活動していた。指導者が

児童のつくった曲を毎回1、2曲全体に紹介したことで、紹介された児童も自信が付き、友達の曲を聴いた児童は、そのよさを自分の作品に生かそうとする態度が見られた。

つくった曲は、まず4、5人のグループ内で発表し、その後、代表の曲を決めて、グループごとに学級全体の前で発表した。代表の曲には、指導者がピアノ伴奏を付けた。

検証授業後、児童がつくった曲にピアノ伴奏を付けてCDに録音し、学級全体で鑑賞した。児童は、自分や友達の曲を聴いて、和声を伴った旋律のよさや旋律づくりを通して喜びや充実感を味わっていたことが、以下の感想から読み取ることができた。

C 児	歌だけで聞くのと、伴奏付きで聞くのと全然ちがって、とてもきれいな曲になっていました。こんなにうまくいくと思わなかったから、やってよかったし、楽しかったです。詩だけのままだと伝わらないことも、曲をつけるとイメージも変わって、その人の気持ちが伝わると思いました。
--------	---

(2) 分析と考察

音楽的な感受、思考・判断の過程を重視した活動構成の有効性

前述(1) ~ の活動構成による指導により、児童一人一人が旋律をつくって表現し、満足感を味わっていた。ある児童は、「作曲の仕方や順番などが分かった。歌詞の音の高さなどを考えながらリズムを作るのが楽しかった。」と書いていた。検証授業後の意識調査では、「音楽をつくるのが好き・少し好き」と答えた児童は、授業前38名中16名から授業後28名と増加した。このことから、音楽的な感受、思考・判断の過程を重視した活動構成の有効性を確認することができた。

教材開発の工夫

旋律をつくって記録するための「作曲カード」(図3)の活用では、児童が自分の記譜の能力に応じたカードを選択できるようにしたことで、記譜への不安感を取り除き、意欲的に取り組むことができたと考える。また、「10の旋律集」や「リズムカード」の活用により、児童が聴唱や視唱、鑑賞等によって感受した旋律を、思考・判断の過程に生かすことができたことが、検証授業後の児童への意識調査からも確認することができた。

他教科との関連

検証授業では、国語科との関連を図りながら旋律をつくる活動を行った。言葉の抑揚やリズムを考えるとこのような「言語活動の充実」は、各教科においても大切なことである。児童は、「言葉に合わせて音の高さを変えるのが難しかったけど、よい経験になった。」と書いている。このように、他教科との関連を図ることで、児童の感受性をさらに豊かにし、自分の意図を表現する喜びや充実感を味わうことにつながると考える。

研究の成果と課題

1 成果

- (1) 「10の旋律集」による音楽の感受や、「リズムカード」「作曲カード」等による思考・判断の過程を促す指導の工夫により、児童一人一人が旋律をつくり、満足感や充実感をもった。
- (2) 題材設定においては、児童にとって生活に密着した内容を扱うことで、自身の意図を音楽で表そうとする意欲が高まった。

2 今後の課題

- (1) 歌詞から旋律をつくる活動では、音型や動機を意識できる詩を教材とする必要がある。
- (2) 自由な発想を生かした表現等、他の創作内容や鑑賞との関連を一層図っていく必要がある。